発掘調査の概要

水落遺跡の調査（飛鳥藤原第165次）

前号（奈文研ニュースNo.40）で報告した水落遺跡第10次調査東区に引き続き、その西隣で2011年１月５日から４月８日まで、西区の発掘調査をおこないました。調査の結果、斉明朝の遺構として、東区から続く通路状の石敷と、水落遺跡の漏刻台と推定される中心建物を囲む、掘立柱建物（以下、囲郭建物）の柱穴を検出しました。

1994年におこなわれた水落遺跡第７次調査では、囲郭建物の南東隅部分を調査し、その部分の柱穴底部に礎盤石があることを確認しました。そのため、囲郭建物は隅部分（２間四方）のみ特殊な構造であり、隅楼のような施設を持つと推定していました（復元模型を飛鳥資料館にて展示中）。

水落遺跡における今回の調査区は、漏刻台を挟んで第７次調査区の対角の位置にあたります。調査の結果、第７次調査と同様の礎盤石を確認しました。礎盤石は一辺約60㎝の平面方形で、根石を据えて固定していました。今回確認した礎盤石は推定北西隅楼の北東隅の柱位置にあたります。

水落遺跡の建物構造における特異性をあらためて確認し、隅楼の存在の蓋然性を高める成果が得られました。　（都城発掘調査部　黒坂 貴裕）

囲郭建物の礎盤石（北西から）

水落遺跡復元模型（南西から、飛鳥資料館展示）

藤原京左京七条一坊・八条一坊の調査（飛鳥藤原第166次）

大和平野支線水路改修工事の事前調査として、藤原京左京七条一坊・八条一坊（橿原市上飛騨町）の発掘調査をおこないました。調査地は藤原宮に南面する「日高山」の東裾にあたり、北区（約155ｍ）、南区（約29.5ｍ）に二分して、幅２ｍという細長い調査区を設定しました。調査は2010年11月29日に開始し、2011年３月３日に終了しました。

北区では、左京七条一坊西南坪内の柱穴や左京八条一坊西北坪内の区画溝と思われる南北溝など、藤原京の時期の遺構を確認しました。

南区では、掘削開始直後から、多数の柱穴群を検出しました。狭い調査区の中で、大小入り交じった円形・長方形の柱穴が重複し、どれがどの柱穴と組み合って建物を構成するのか、頭を悩ませました。慎重に柱穴の前後関係や出土した土器の検討をおこなった結果、柱穴群には４時期以上の変遷があることがわかりました。

そのうち藤原京の時期には一辺１ｍを超える大きな柱穴をもつ掘立柱塀が建てられていたことが明らかになりました。調査区のすぐ東側には坊内道路（東一坊坊間路）が通じています。おそらくこの塀は坪内の施設と道路との間を区画していたのでしょう。柱穴の重複関係からは複数回の建て替えをおこなうなど、藤原宮と朱雀大路にほど近いこの地域において、活発な土地利用がおこなわれていたことがわかります。

今回の調査を通じて藤原京建設前後の土地利用の変遷を垣間見ることができました。地道な調査の積み重ねにより、古代都市藤原京の姿が少しずつ明らかになっていく、そう感じた調査でした。

（都城発掘調査部　小田 裕樹）

掘立柱塀の解体時に捨てられた土器（南から）

平城京左京三条三坊一・二坪の調査（平城第478次）

国営歴史公園化以後、平城宮跡は国土交通省による整備事業が開始されています。この計画の中で、復原された朱雀門の南東の敷地には、「平城宮跡展示館（仮称）」の建設が予定されています。本調査は、その建設の事前調査で、当地の遺構面の高さや、遺構の残存状況の確認を目的としています。調査区は、南北103m、東西10m、面積は1,030㎡、調査期間は、2010年12月20日から2011年３月30日まででした。

調査地は、平城京左京三条三坊一・二坪にあたり、西隣は史跡朱雀大路跡として整備されています。これまで調査地の西辺では、奈良文化財研究所や奈良市教育委員会による発掘調査がおこなわれており、一坪と二坪の間を通る三条条間北小路や、一坪内をほぼ南北に二分する東西道路などを確認しています。また、一坪の外周には想定される位置に築地塀などの遮蔽（しゃへい）施設がなかったとみられ、朱雀門にもっとも近接したこの坪の特殊性が注目されていました。

調査では、上記の三条条間北小路や東西坪内道路の延長部分の遺構が、想定される位置で検出され、また、三条条間北小路に面する一坪の南辺でも築地塀などの遮蔽施設がないことを確認しました。

さらに、調査区の中央付近、東西坪内道路のやや北側では、非常に巨大な井戸を検出しました。

この井戸は上下二段に分かれ、上段は内法2.4mの正方形、下段は一辺約１mの六角形という、非常に特殊な構造でした。上段は最下部の土居桁（どいげた）のみが残存しており、井戸枠はすべて抜き取られていましたが、下段の井戸枠はすべて良好な状態で残っていました。井戸枠を詳しく見ると、上下段とも隅に柱を立て、柱に溝を切って、そこに横板を落とし込む構造で、奈良時代の技術の高さがうかがえます。また、上段と下段の間には、こぶし大の玉石を敷き詰め、底面の保護をするとともに、見栄えを良くする工夫をしています。井戸の深さは、遺構検出面から下段の底面まで2.6mでした。下段の埋土からは、奈良時代の土器をはじめ、瓦、木製品、金属製品、木簡など、多種多様な遺物が出土しています。これらは土ごとコンテナに入れて持ち帰り、現在も整理・洗浄作業がおこなわれています。この特殊な井戸の機能に関しては、これらの出土遺物の整理をまって、総合的に検討する必要があります。

また、調査区の北端では、掘立柱建物の一部が確認されていますが、全体としては遺構の密度は高いとはいえず、この場所がどのような性格であったかは、今後おこなわれる周辺の調査により明らかになっていくことでしょう。

朱雀門の目の前にあるこの一等地を、どのように使っていたのか、今後の調査にご期待ください。

（都城発掘調査部　大林 潤）

調査区と朱雀門、第一次大極殿（南東から）

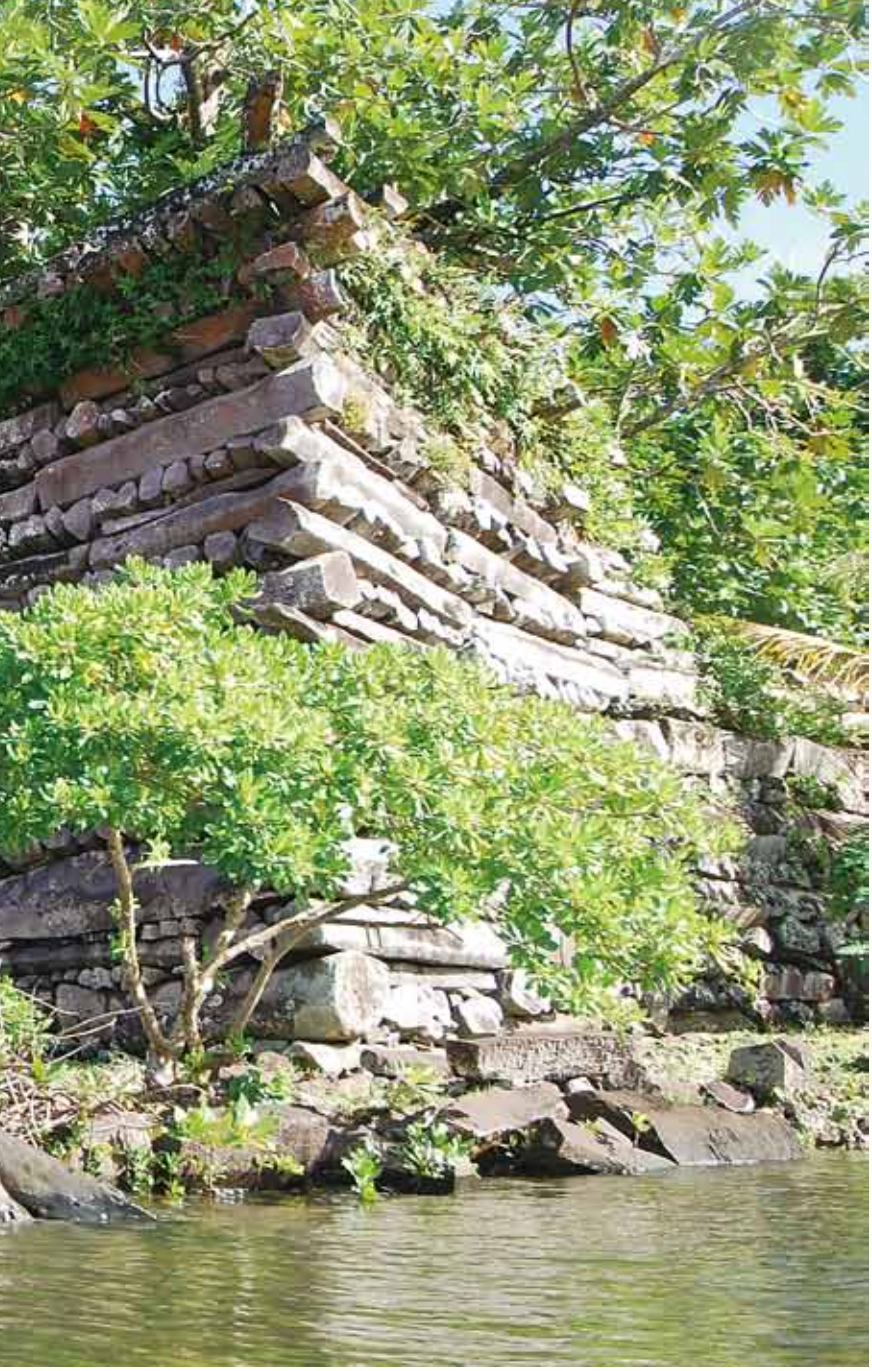
二段組みの井戸（西から）

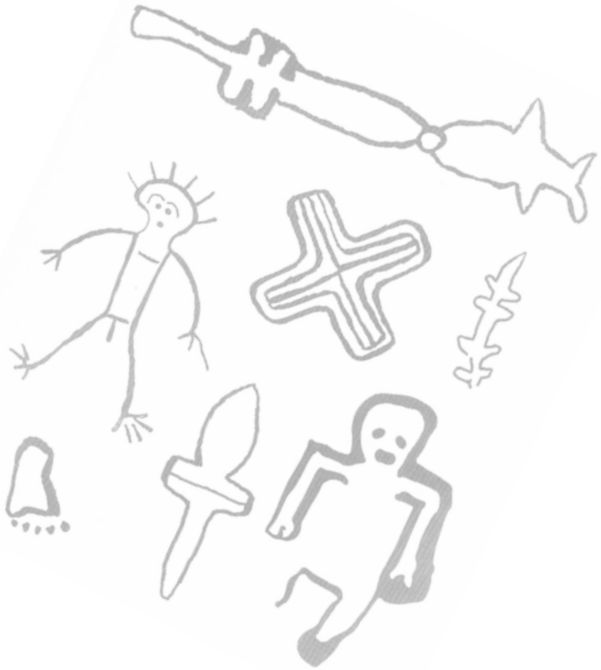
ミクロネシア連邦：ナン・マドール遺跡

ミクロネシア連邦ポンペイ島にあるナン・マドール遺跡は、巨大な玄武岩石材で構築された大小95の人工島によって成り立つ巨石文化の遺跡です。海に人工島が浮かぶその姿は時に「太平洋のベニス」とも形容され、その不思議な光景は時に「ムー大陸の遺跡」と呼ばれることもあります。これまでの考古学的調査により、西暦500年頃に人工島の建造が開始され、1000から1200年頃のシャウテレウル王朝の時期に最盛期を迎えたと考えられています。人工島を構成する玄武岩は、最も大きなもので推算90トンにおよびますが、これら石材が切り出されたのは遺跡から少なくとも10数km離れた島の反対側と考えられており、どうやってここまで運び、どうやって積み上げたのかについては、まだほとんどわかっていません。

ミクロネシア連邦をはじめとするオセアニア地域は、地球の表面積のおよそ1/3を占めるほどの広大な地域であるにもかかわらず、ユネスコ世界遺産に登録されている遺跡はイースター島（ラパヌイ）の人面石など数えるほどしかありません。ミクロネシア連邦は長年、このナン・マドール遺跡の世界遺産登録を希望していましたが、このたびユネスコの要請により、文化遺産国際協力コンソーシアム（事務局：東京文化財研究所）が調査団を組織し、2011年2月に現地調査を実施しました。奈良文化財研究所からも研究員1名が参加し、遺跡の保存状況のモニタリング、現地の遺跡保護体制の調査、現地住民へのヒアリングなどを実施し、日本による国際協力の可能性を探るための調査をおこないました。

（企画調整部　石村 智）





海に浮かぶ古代都市

人工島の間をめぐる水路

それぞれの人工島の間には水路が網の目のように張り巡らされており、引き潮の時には歩いて渡ることもできますが、満ち潮になるとボートやカヌーで行き来することとなります。

ナンタワスの内部にある石室

95 ある人工島のそれぞれには名前がつけられており、伝承が残されています。最も大きな島「ナンタワス」は王墓で、二重の周壁の内部には柱状玄武岩で構築された石室があります。

コロンビア大学との研究交流

2011年3月9日付けで、奈良文化財研究所は米国ニューヨーク市所在のコロンビア大学中世日本研究所（バーバラ・ルーシュ所長）および建築・計画・保存大学院（マーク・ウィグリー大学院長）と研究協力および交流に関する覚書を交わしました。その内容は、2011年4月1日から2016年3月31日までの5年間にわたり、①研究者の交流、②文化遺産の調査・研究、保存修復に関する学術活動の共同実施、シンポジウムの共同開催、③三者が関心を有する文化遺産の調査・研究、保存修復に関する情報の共有、学術資料の交換をおこなうものです。具体的な実施方法は別途協議としましたが、当面考えていることの一つは、奈文研から年間2名程度の研究員をコロンビア大学に派遣して、研究成果の公表や先方の研究者との議論をおこなうことです。

奈文研は、文化遺産およびその保存や整備に関し、国内はもとよりアジアを中心とする諸外国の物件を対象に大きな成果をあげてきました。しかし、そのことが広く国際的に評価されてきたかというと、必ずしもそうとは言い切れません。その理由の一つに、英語による国際的な情報発信が十分でなかったことがあろうかと思います。今回のコロンビア大学との研究交流では、奈文研の研究員が自らの成果を国際的に発信する端緒とするとともに、米国の研究者との議論を通じて、新たな研究の視点や方法を獲得することが期待されます。同時に、先方からも文化遺産に関する共同シンポジウムの開催など、積極的な働きかけが予想されます。これらを通じて「世界の奈文研」への足がかりができればと考えています。

（文化遺産部　小野 健吉）

中世日本研究所のあるコロンビア大学ケントホール

西トップ遺跡 現地事務所の開設

奈良文化財研究所では1993年度よりアンコール文化遺産保護に関する研究協力事業を進めており、1996から2000年度にはタニ窯跡の調査を、2002年度からは西トップ遺跡の調査をおこなっています。

西トップ遺跡はアンコール・トムの中にあり、バイヨン寺院の南西に位置しています。奈文研では、西トップ遺跡に関わる考古学、建築、保存科学の各分野からの調査を進めており、昨年度の発掘調査では金やルビーなどを納めた鎮壇具や仏像など新たな発見が相次ぎました。

しかし、2008年に中央祠堂東面の石材40石ほどが落下するなど、祠堂群は大変不安定な状態にあります。そこで、これらを修復するため、2011年度から「西トップ遺跡等調査修復現地事務所」が発足し、2015年度までの5ヵ年計画で西トップ遺跡の調査・修復事業に取り組む運びとなりました。

6月から調査員が本格的に長期滞在を開始し、本事業にかかわる様々な業務に携わっています。早速6月8・9日には、アンコール遺跡の調査・修復に従事する各国調査団による「第20回国際技術小委員会」が開催され、奈文研も調査報告と修復事業について発表しました。同13・14日には「東南アジア窯跡研究会」が現地事務所で開催され、第一線で活躍中の研究者が世界各国から集まり、熱い議論が交わされました。また現地事務所に、新たに遺物展示コーナーを設けました。研究者だけでなく一般の方々にも広く私たちの活動を知っていただけるように、これからも展示を充実させていこうと考えています。皆様、ぜひ一度お越しください。

（企画調整部　佐藤 由似）

西トップ遺跡 現地事務所の外観

他館で活躍する所蔵模型のご紹介

奈良市庁舎「第一次大極殿」/ミュージアム飛騨「朱雀門」

博物館や資料館などでよく見かける「模型」。平城宮跡資料館には、第一次大極殿院と発掘調査の過程の模型、遺構展示館には内裏と磚積基壇建物の模型が展示されています。奈良文化財研究所の模型は、遺跡の当時の状況を再現し、外観や内部の構造を解明・理解するために設計・制作されたものです。

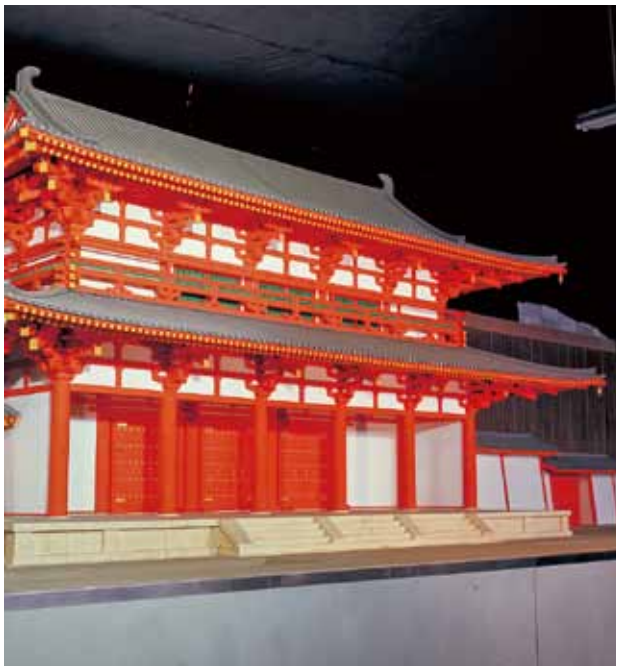
奈文研では、このほかにもさまざまな模型を所蔵しています。そのなかには、他の博物館などで展示しているものもあります。今回は、それらの模型をご紹介します。

【第一次大極殿 模型（1/10）】

かつて遺構展示館にあった模型です。現在は、奈良市役所の１階ロビーに展示されています。昨年の平城遷都 1300 年祭を機に移設しました。このほか市役所には奈文研所蔵の平城京出土瓦や銭貨が展示されており、訪れる市民の方々に奈良の都を味わっていただける空間になっています。

【朱雀門 模型（1/10）】

昨年度は島根県立出雲歴史博物館の企画展や飛鳥資料館のキトラ展で展示されました。このたび、藤原京や平城京の造営に飛騨の匠が活躍したことが縁となって、６月からリニューアルオープンする岐阜県高山市のミュージアム飛騨の常設展示に貸出すことになりました。　（企画調整部　渡邉 淳子）



朱雀門模型

『キトラ古墳壁画フォトマップ資料』

2004 年、キトラ古墳石室内の調査に先立ち、壁画の正確な図面と写真を作成するため、フォトマップ撮影をおこないました。フォトマップとは、撮影したデータを解析・合成することにより、計測対象物に接触せず正確な図面と画像を得る方法です。写真室では初めておこなう手法であったため、撮影までは試行錯誤の連続で、撮影に入ってからも様々なトラブルに見舞われました。最終的な撮影総数は、計測用写真等も含めると 1,200 カットを越えます。そのかいもあり出来上がったフォトマップは１m で± 3㎜というきわめて精度の高いものになりました。また、この成果が 2006 年におこなった高松塚古墳におけるフォトマップ撮影にも大いに活かされ、さらに高精度なデータを得ることにもつながりました。

この度、高松塚古墳に続きキトラ古墳においてもその成果を知っていただくために、『キトラ古墳壁画フォトマップ資料』（奈良文化財研究所史料第 86 冊）を刊行しました。高松塚古墳でも好評を得たブルーレイハイビジョン動画（映像時間 17 分）もあわせて作成しており、ナレーションは日本語以外に英語・中国語・韓国語で聞くことが出来ます。図版に載せている各壁画は一部を除きフォトマップデータを基にしているため、歪みのない正確な形をしています。詳細な観察がおこなえるように実寸での掲載にこだわり、星宿にいたっては約 84 × 74㎝の用紙に印刷し、巻末折り込みにしています。是非一度開いていただき、壁画の実際の大きさを体感してください。　（企画調整部　岡田 愛）

キトラ古墳壁画フォトマップ資料

飛鳥資料館 夏期企画展「鋳造技術の考古学 - 東アジアにひろがる鋳物師のわざ―」

金属を溶かし、鋳型に流し込むことによって製品を作る技術を鋳造技術といいます。東アジアにおける鋳造技術は、いまから4000年以上前の中国で出現し、殷周時代の複雑な青銅器を作り上げるまで発展します。やがてその技術は周辺の地域に伝わり、日本では奈良時代に巨大な東大寺盧舎那仏像を築きあげます。

奈良文化財研究所では、これまでの60年近くにわたる活動のなかで、飛鳥・奈良時代を中心とした数多くの鋳造遺跡の調査をおこなうとともに、梵鐘・鏡・銭貨などさまざまな金属製品にたいする研究に取り組んできました。

本展では、東アジア史的な観点から鋳造技術の歴史的変遷をたどるとともに、奈文研の鋳造技術に関する調査研究を紹介します。

（飛鳥資料館　丹羽 崇史）

開催期間：2011年8月2日（火）～9月4日（日）
お問合せ：TEL　0744-54-3561（飛鳥資料館）
開館時間：9：00～16：30（入館は16：00まで）
休 館 日：月曜日

平城宮跡資料館 新規常設展「考古科学コーナー」オープンのお知らせ

平城宮跡資料館に、新しく「考古科学コーナー」が登場します。場所は館内の北西、企画展示室の隣のスペースです。

会場は、保存科学・年輪年代学・環境考古学・測量と探査の４つの分野で構成され、奈文研でおこなっている文化財の科学的な分析方法を、わかりやすく解説します。お子さまでも楽しめるように、各分野に体験コーナーも設けています。

オープンは７月末の予定です。みなさま、親子連れ、お孫さん連れで、夏休みに是非お越しください。

（企画調整部　渡邉 淳子）

お問合せ：TEL　0742-30-6753（連携推進課）
開館時間：9：00～16：30（入館は16：00まで）
休 館 日：月曜日（月曜が休日の場合は火曜休館）、年末年始

■　お知らせ

飛鳥資料館　夏期企画展
2011年8月2日（火）～9月4日（日）
「鋳造考古学の世界－東アジアにひろがる鋳物師のわざ－」

公開講演会（109回）
2011年10月15日（土）
於：平城宮跡資料館

特別公開講演会（東京会場）
2011年12月3日（土）
於：学術総合センター　一橋記念講堂

■　記　録

埋蔵文化財担当者専門研修
○建築遺構調査課程
2011年6月13日～17日　9名
○建造物保存活用基礎課程
2011年6月20日～24日　20名

現地説明会
○平城第481次発掘調査（平城宮跡東院地区）
2011年6月19日（日）　650名

平城宮跡資料館　春期企画展
2011年2月19日～5月8日
「発掘速報平城2009･2010」　38,127名

飛鳥資料館　春期特別展
2011年4月16日～5月29日
「星々と日月の考古学」　10,679名

公開講演会（108回）
2011年6月18日
於：平城宮跡資料館　248名

編集　「奈文研ニュース」編集委員会
発行　奈良文化財研究所　http://www.nabunken.go.jp/
Eメール　jimu@nabunken.go.jp
発行年月　2011年6月